

一 一 月 例 会 発 表 要 旨

特集

言葉と被傷性

——クイア・スタディーズの現在と文学研究

【特集の趣旨】

運営委員会

性、身体、欲望の規範的であり方を問い、特定の生が不当な暴力や死にさらされていることを問題にしてきたクイア・スタディーズの中で、「被傷性 (vulnerability)」という概念は重要な位置を占めてきた。人間存在は、自らの生存を外部にある言語や社会に依存し、つねに他者にさらされている。そうした「被傷性」をめぐる問題は、ジュディス・パトラーやイヴ・K・セジウィックら、フェミニズム、クイア理論の研究者も指摘しており、彼女たちは、人種的、民族的、性的マイノリティら、特定の人々へと生のあやうさが集中

する政治への批判を行ってきた。現在においても、ヘイトスピーチやヘイトクライムなど、不均衡な形で発露する暴力は起り、言語の力によって人は「被傷性」にさらされてしまふ。しかし、この「被傷性」を媒介として、新たに他者との親密な関係性を構築することはできないだろうか。

一九八〇年代のエイズ危機の際、アメリカ合衆国政府の支援がえられない中で、レスビアン、ゲイ、トランスジェンダー、フェミニニストなど多くのクイアな人々は、沈黙していれば見殺しにされるのだという怒りを訴えた。エイズ・アクティヴィズムと呼ばれる社会運動は、差異を含んだ連帯を行い、自分たちを周縁化する社会自体を問うた。このようなエイズ・アクティヴィズムの影響は、クイ

ア・スタディーズへと引き継がれてゆく。「クイア (queer)」という蔑称に傷つき、打ちめされた人々は、蔑称を逆手にとつて、「わたしは、まっとうでも、ふつうでもないけど、それが何か？」と社会の主流派を問い、蔑称を自らの呼び名として再盗用 (reappropriation) した。クイア・スタディーズの初期において問われたのは、「被傷性」だった。

本企画では、こうしたクイア・スタディーズの問題意識を共有しながら、具体的なテクストを分析することで、「被傷性」を生じさせる社会的な条件や言語のあり方自体を問いたい。その際、これまでの日本近代文学研究におけるクイア批評が、「男性」同士のホモソーシャルな関係や「男性」同性愛表象に重点を置いてきたのに対して、「女性」たちの絆、性を越境する人々、規範的な身体を持たない人々、そして、未だ名づけえぬ親密な関係性まで含めて議論し、クイア・スタディーズと文学研究の協働を行うためのプラットフォームを構築する。

三島由紀夫文学とクイア・アダプ
テーション

有元 伸子

「金閣寺」の主人公「語り手は、幼時から」文の語つた金閣の幻」によつて呪縛され、さらに「吃りのくせに」と周囲から嘲笑された体験を語り起こす。彼は、言語の「先行力」と「中傷する言葉の力」と(ジュディス・パトラー「言葉で人を傷つけること」『触発する言葉』)、いわば言葉の暴力性によつて二重に傷つけられながら自らを主体化してきた人物であつた。

では、その彼が社会に拠り所を求め、他者と親密な関係を結ぼうとすると、体験はどのように語られたらうか。

三島由紀夫は、「仮面の告白」や「禁色」において、性的マイノリティとしての自覚と他者や社会との相剋の苦しみを描いた。だが、キース・ヴァンセントが「彼が生きた時代は、男色」により寛容な世界には遅すぎ、ゲイの行動主義やゲイのプライドといった文化の開花を経験するには早すぎた」と提示したような

時代との相関もあつて(三島由紀夫はゲイ作家だったのか? 『21世紀の三島由紀夫』)、「禁色」以降の作品群においては性的指向が明示されることはほほなく、読者による徴候的読解によつて読み取られるしかない。

こうした読者による試みは、研究や批評においてのみなされるわけではなく、しばしば創作の形をとつて表れる。近年では、サブカルチャー領域における二次創作のなかに、「原作」においてはほのめかされているにすぎないクイアな欲望を再解釈し、オルタナティブな物語を生み出す実践がみられることを指摘するような研究が出てきているが、そのような動向は三島文学を原作とした多領域にわたる諸作品にもみられるものであつた。

本発表では、三島由紀夫の作品における言葉と被傷性の問題を検討したうえで、三島文学をもとに創作された演劇や映画作品による再解釈や転倒の可能性を探つてみたい。

差異とつながりと一九九〇年代の
「クイア」

黒岩 裕市

一九九〇年にカリフォルニア大学サンタクルズ校で開催された研究会議「クイア・セオリー」はクイア・スタディーズの出発点のひとつとみなされている。その成果をまとめた『ディアファレンシズ』一九九一年夏号のテレサ・デ・ラウレティスのイントロダクション「クイア・セオリー」によれば、当時すでに定式化していた「レズビアンとゲイ」という用語に距離を置き、この表現のもとでかえつて不可視化されるレズビアンとゲイ男性の間の差異、あるいは人種の差異に光を当て、批評的対話を行なうために、もともととは差別的蔑称であつた「クイア」が用いられたのであつた。九六年に行なわれたインタビューでも、ラウレティスは差異を語りあつたうえでの連帯の可能性を強調するのだが、一方で「クイア」が非規範的な性を生きる人を包括的に指す用語として使われるようになったことに反

対し、「クイア」とは距離を取っている。

ラウレイティスの「クイア・セオリー」の抄訳は『ユリイカ』一九九六年一月「クイア・リーディング」特集号に掲載されたのだが、日本でも九〇年代半ばには「クイア」が語られるようになっていた。本発表ではまずラウレイティスも論点としていた差異とつながりに焦点を合わせ、九六年前後の日本で「クイア」を通じていかなることが試みられようとしていたのか、またそこで何が問題として提起されたのかをいくつかの文献から検討する。

続いて、藤野千夜が九六年に発表した『少年と少女のボルカ』を同時期の「クイア」をめぐる言説を踏まえながら読む。この小説では対話や連帯が求められることはない。しかしながら、性や身体の差異——顕著なものとして性自認と性的指向の違い——を前提として、登場人物の間では他者の問題を「自分の問題」に引き寄せてとらえる瞬間や、支配的なジェンダーやセクシュアリティのあり方・考え方への違和感や反発を共有する瞬間が見られる。特に暴力を受けやすい身体や病む身体の表象に目を向け、差異とつながりが感じられる瞬間について考えたい。

セクシュアリティの可変性

——「ソフト化」が覆うもの、時間と性、
名称からの逸脱

坂上 秋成

近年、日本社会においてLGBTという語は紛れもなく存在感を高めている。言い換えればそれは性的マイノリティに対する社会的関心が高まっているということでもあり、渋谷区における「パートナーシップ条例」のように実質的な成果を見て取ることもできる。

しかし同時に、LGBTという語で「ソフパッケージング」することによって、性の多様性がひとつの共同性の中に閉じ込められてしまう側面があるということを忘れるべきではない。

クイア的な性は、決して社会制度や法整備の改善だけで処理できるものではなく、個別的な性が抱える実存へいかにして切り込むかもまた重要な課題である。それは同時に、社会的・政治的な文言で回収できない生理的な

問題を、文学をツールとして用いることで取り出そうとする試みの重要性を示唆している。

こうした観点から、今回は志村貴子『放浪息子』と村田沙耶香『ハコブネ』を題材とした議論を展開してみたい。

『放浪息子』はマンガ市場の問題とも深く結びついている。日本のマンガ市場において、すでにBL／百合というジャンルは一定の読者層を獲得しているが、そこにはゲイ／レズビアンという生々しい言葉を回避しながらネタ的に性を消費するような「ソフトコンシューミング」によって、逆にクイア性の問題を置き去りにしてしまう側面も見られる。その中で本作は、少年少女の生々しい葛藤を時間性によるセクシュアリティの不／変化と共に描いたという点で重要な作品だ。

また『ハコブネ』は、自身の性を把握できない女性が脱人間化する様を捉えることで、規範化された性の図式を脱臼させ、読者の生理そのものを塗り替えるような機能を持った小説である。それは理解しやすい記号で性を把握するのではなく、むしろ名付け得ぬ性を認めることで多様性を提示するような試みだ。

この二作品に加え、わたしの著作である『惜日のアリス』『夜を聴く者』における性への意識を絡め、パッケージングを逃れていくセクシュアリティの可変性を問い直すことが発表の狙いとなる。

【プロフィール】

坂上秋成（さかがみ・しゅうせい）…一九八四年生。小説家。

代表作に『夜を聴く者』『惜日のアリス』（河出書房新社）、「みんなのコミック」連載中の『BIRTHDAY GIFT』など。「朝日新聞」「産経新聞」「共同通信」「ユリイカ」「cakes」「4Gamer」「週刊読書人」などに批評・書評を寄稿。